ARTS & ROUTES
あわいをたどる旅

JOURNAL 02

◎プロジェクト＝2019年5月始動 現在進行中
◎展覧会＝~~2020年4月25日(土)〜7月5日(日)~~ 延期

出展作家＝岩井成昭／岸健太／迎英里子／長坂有希／藤浩志
企画監修＝服部浩之（キュレーター）
企画運営＝NPO法人アーツセンターあきた
主催＝秋田公立美術大学

秋田公立美術大学
AKITA UNIVERSITY OF ART

arts center akita

www.artscenter-akita.jp/artsroutes

展覧会会場＝未定
出展作家＝岩井成昭・岸健太・迎英里子・長坂有希・藤浩志
リサーチアソシエイト＝石倉敏明・唐澤太輔・小松和彦
グラフィックデザイン＝吉田亮人・塚本凌佑
企画監修＝服部浩之
企画運営＝NPO法人アーツセンターあきた（岩根裕子・石田律・藤本冬樹子・高橋ともみ）
主催＝秋田公立美術大学

本紙は、展覧会オープンに向けて、出来事や表現者たちの軌跡をたどる媒体です。
通常は見ることのできない、出来事や時間などかたちを持たないものを展覧会へと描き出す過程を
アーティストや企画者が公開し、思考や出来事を可視化していきます。

JOURNAL 02

ARTS & ROUTES あわいをたどる旅

江戸時代後期に東北全土を歩き、
旅のなかで様々な土地に逗留して文化習俗、
風土、宗教や儀式、人々の生活の様子などを
記録し続けた菅江真澄。
約200年前に真澄が残した記録に宿る
創造性に着目し、
その旅の軌跡をたどるプロジェクトが始まりました。
現代美術は、様々な領域のあわい（間）に存在します。
アーティストたちは歴史学や地理学、
人類学や数学、情報技術など隣接する
多様な領域の知に刺激を受け、
現在の世界を描出しようと試行しています。
本展は真澄の旅の軌跡をたどるプロジェクトを起点として、
出来事や時間などかたちを持たないものを
展覧会へと描き出す、新たな試みです。

PROJECT 〈04〉
長坂有希

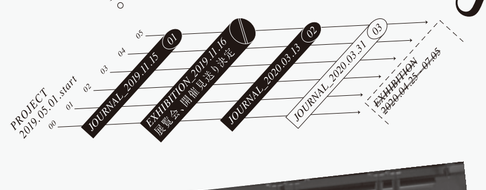
プレ展覧会
「木：これから起こるはずの
ことに出会うために
Trees: Audition for a
Drama still to Happen」

会期｜2019年11月16日（土）
〜2020年1月12日（日）

秋田県立博物館蔵

菅江真澄
（1754−1829）

江戸時代後期の紀行家、博物学者。宝暦4年（1754）三河国（愛知県東部）生まれ。本名は白井英二とされ、旅に出てから白井秀雄、秋田に入ってからは菅江真澄を名のった。和学や和歌、漢学、本草学、医学などを修めた後、30歳で故郷を旅立ち、信濃、越後から現在の秋田、津軽、下北半島などを北上し北海道を巡歴。48歳で再び秋田入りしてからは秋田領内を巡り、土地の民俗、歴史、地理、考古、詩歌、宗教、科学など多岐にわたる内容を客観的な目線で日記や地誌、随筆として図絵と文章とで記録した。これらは「菅江真澄遊覧記」と総称され、自筆本89冊が重要文化財に指定されている。文政12年（1829）に仙北郡で亡くなるまでの29年間を秋田で過ごし、なまはげを初めて記録するなどその著作や図絵は貴重な資料である。



「菅江真澄をたどる勉強会②」開催レポート
（ディスカッション）

2019/10/07
PROJECT 〈00〉

全文はWEBにて

前半　長坂有希レクチャー

真澄の絵 ーオリジナルと複写のズレー

通常、私たちが目にしている真澄の絵は、真澄が描いたオリジナルの絵ではなく、複写されたものです。そして、実は複写とオリジナルには結構な違いがあります。右が真澄が描いたオリジナルで、左が明治5年に書写されたものです。文字情報としては全て正しいし、絵も似た感じで描かれてはいるのですが、木が持っている力強さが違う。真澄が描いた幹や葉には、大胆でダイナミックです。

オリジナルと複写を比べてみることで、もしかしたら複写が明治に描かれて以来今まで、真澄の残した図絵や文章は、文献的な資料として扱われることが多かったのではないかと思いました。美術的な絵として認識されることが少なかったからこそ、複写されたものでも良しとされていたのかなと考えました。

真澄はとっつきにくくて感情を表さない、捉えどころのない人物という印象を受けると思うのですが、自分の足で実際に旅をしながらそれぞれの場所に行って風景を見て、全体の風景の流れのなかで木を体験し、記憶して描いています。それがこれらの絵に説得性やリアリティーを与えている気がします。オリジナルと複写を比べてみることで、真澄は思いのほか、木に対して思い入れがあったのではないかと思いました。

真澄の描いた木の絵を見ていくと、記述するに値する珍しい木だったり、大木だったりするのはもちろんですが、真澄がそチーフ自体を好きだったような気がしています。真澄は木にまつわる風習や言い伝えを記しているのですが、それだけではなく、生物学や地質学、環境学的な視点からも題材にした木を選んでいたのではないかという気がしました。

「写す」行為を通して、真澄の意識を取り入れる

真澄の活動や人生について考えると、移動が多い自分の活動や人生と共通するテーマがあると思っています。それは「移動と定着」ということです。この「移動と定着」という概念や状況を「木」という行為として考えてみたいと思いました。具体的には、真澄が描いた木の絵を「写す」行為を通して、展示を構築していきたいと思っています。「写す」といってもいろいろな写し方があり、手で写すことや、印刷技術とかプリントメイキングの手法を使って写すなど、いろいろな写し方を試したいと思っています。写しながら、生涯旅を続けた真澄が、それぞれの土地で根付き、長い間生きてきた木や風とどんなことを思ったのかを想像したり、写す行為を通して彼の旅を追体験しながら、彼の意識を自分の中に取り入れることができないかと考えています。

移動・定着・木・人

また、描かれているそれぞれの木を通して「移動と定着」について考えたいと思っています。例えば、そもそも根っこが違う同じ種類の木が長年一緒に育ってきたりして混じりあって1本になった木を通して「移動と定着」を考えたり、「移動と定着」という異質に感じるものを混じり合った同体として取り扱うことはできるのかなと。あるいは、ずっとある場所に定着していた古い柱の木に、移動してきた桜の木が寄生することによって、移動・定着という2つの要素が同時に存在するという状況は、人やいろいろなものごとにも転用して考えられるのではないかと思いました。

秋田滞在中に出会った真澄の「木」

江戸時代後期に旅を続け、図絵と文章とで記録した菅江真澄を起点とした展覧会のプレ企画に位置付けられる本展。秋田滞在中に長坂が出会ったのが、真澄が書き記し、描き残した「木」だった。長坂「真澄の図絵を見ていくなかで、私にとって「木」が最も魅力的に思えたし、人間と自然とのつながりを考えるプロジェクトを進めている私の関心とも共鳴しました。『木』は長い間生きていて、人間との関わり合いがとても強固な存在。見ていて単純に魅力的に思えたことと私の関心を反映していること、どちらからも交差するところにあったのが「木」でした。イギリスでは産業革命で工業化が進んでいた時代に、真澄は真逆の動きをしていたことも対照的で面白かった」

真澄の視線の意図を理解する行為として

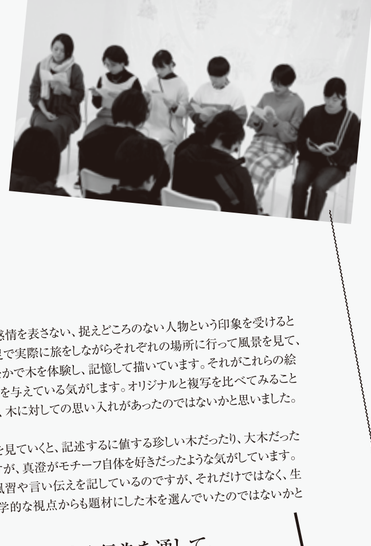
本展では、BIYONG POINTの白い展示空間を黄色の照明で包み込みました。展示作品は水墨彩画で描いた《真澄の木》7点と、シルクスクリーン印刷した布《彼の眼差しを通して見る》、テキスト《これから起こるはずのことに出会うために》。制作の前提として意識したのは「写す」ことだった。長坂「まず、真澄の図絵を「写す」ことがありました。江戸時代の人たちも、対象物を勉強する時はまずは写していた。それに、真澄の直筆と思って見ていた図絵が実は写しだったということもあり、それなら私なりの意図を持った写しを描いてもいいのではないかと思いました。理解する行為として写したいと。真澄の写しは明治5年に描かれていますが、それは近代化によって資源が求められていた時代。私はそれとは違う意図を持って写しをしたかった」

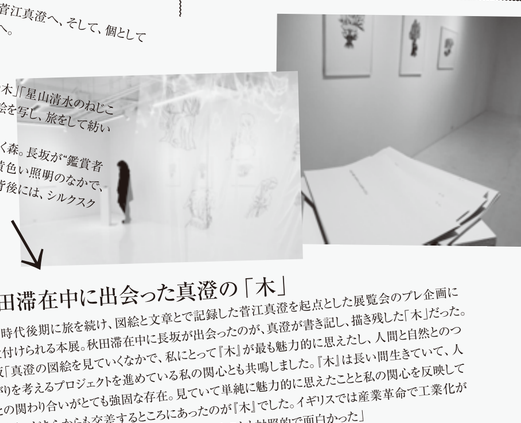
長坂は秋田での滞在中、江戸時代に真澄が記録して現在も存在する「木」、もう存在しない「木」を訪ねて各地をめぐったという。

長坂「木を実際に見に行って、周りを見て、木だけを描く。木がもうそこになくとも、そこにある森を歩いて地形を見る。そうすることで真澄の意図、視線の意図を汲み取ることを重視しました。いろいろな時間が交差していることを感じたい。交差している状況を感じたいとも思いました」

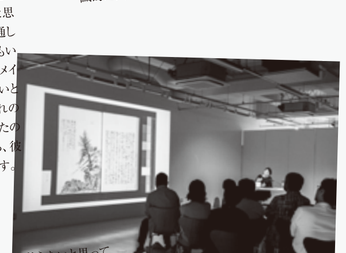
真澄の木と、それを写した長坂の木。真澄の記録と、それを読んで「木」をめぐった長坂の回想。意識的に「ずれ」と向き合った長坂の眼差しが黄色い空間に溶け込む。

テキスト：高橋ともみ
2020/01/23





長坂有希／1980年大阪府生まれ。テキサス州立大学美術学部卒業、国立造形美術大学ミュールドルフ・ブランクフルト修了。2012年文化庁新進芸術家海外研修制度によりロンドンに滞在。リサーチとストーリーテリングを制作の軸として、遭遇した事象の文化、歴史的意義や背景の理解を、様々な媒体をつかい表現している。主な展覧会に「光北の彫琢」（ポルト市立美術館、2017年）、「マイ・ワンダフル・メモリーズ」（国際芸術センター青森、2014年）、「Signs Taken in Wonder」（オーストリア応用美術館MAK、2013年）など。



菅江真澄のアーティスト・イン・レジデンス

服部：通常、アーティスト・イン・レジデンスなどでどこかに行くと他にも作家がいますが、今回滞在制作する作家は長坂さん1人です。同じ状況の人がいないことを長坂さんはどう感じていますか。

長坂：菅江真澄は一生旅をしていた人。今回私が置かれている状況も、全然知らない人や場所のなかで制作に集中するという「アート道場」のように感じています。普段の生活というルーティンがないなかで、ずっと生活して、制作していくことに私は限界のようなものを感じることもあって、これをずっとやっていた真澄の人生って…と思うこともあります。

唐澤：真澄はそれこそいろいろなところにアーティスト・イン・レジデンスのように滞在して、いろいろなものを描いているわけですが、その土地の人たちにとても歓待されているのですよね。土地を離れる時には、何十人というお見送りの人が来て手を振ってくれたこともあった。それはおそらく、彼の絵にあると思うんです。彼は絵を描いて、その土地の人たちに見せていた。そして、人々は見せてもらうことによって「自分の住んでいる場所にこんな知らないことがあったんだ」と気づいたりする。それがすごく嬉しくて、どんどん交流が深まっていったということがあると思うんです。

これは服部さんに聞いてみたいのですが、今のアーティスト・イン・レジデンスでも、真澄のように何か自分の持っている知識とか絵とかを地域の人に見せて喜んでもらうということをアーティストたちはやっているんでしょうか。

服部：アーティスト・イン・レジデンスって、公共機関がやっている制度としてのものと、もっと自発的に勝手にやっているものとがあります。アーティスト・イン・レジデンスという制度は多分、地域との交流を目的につくられたものの専門家をはじめとする世界中の人々とアーティストが出会うことで彼らが成長し、キャリアを形成していく人材育成を念頭に置いたものだったと思うんです。つまりアーティストが「滞在すること」自体に価値が置かれていたわけです。

日本でアーティスト・イン・レジデンスを最初に始めたのが、茨城県のアーカスプロジェクト（1995年）。県が立ち上げた事業で、国際交流や人材育成だけでなく地域交流も納税者へのわかりやすい還元となる目的のひとつとしてあったんだと思います。地方都市や小さな街でアーティスト・イン・レジデンスを行っていると、ころが多かったんですよね。そのため、日本のレジデンスやアートプロジェクトって地域交流が結びつけられることが一時期は強かったと思います。アーティストに滞在以上のことを求めることに繋がり、ワークショップやトークをして積極的な交流を促したり、元々は派生的なプログラムだったものが主目的になるなど、本来転倒になることも多々あります。

今は状況は変わっていると思いますが、いずれにしても他者がやって来ることによって、何か新しいものや異なるものが運ばれてくるというのは、あったはずです。

また、近年は、おそらく格安航空の出現など移動の低価格化と多様化の影響もあり、レジデンスのあり方もますます多様化しています。短い滞在を何度も重ねることで作品を深めていく人、同時に異なるレジデンスを往来する人もいれば、2年とか長い期間の活動拠点としてレジデンスを活用する人もいる。真澄は様々な土地に異なるかたちで滞在したレジデンスの多様なあり方を既に実践していた人かもしれません。

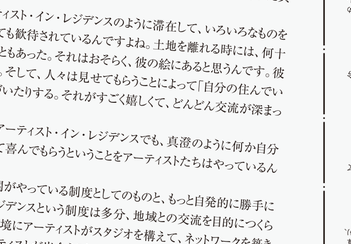
手で「写す」ことから真澄にアプローチする

服部：長坂さんはこれから「写す」ことをやっていくわけですよね。「写す」という行為をどういうふうに考えていますか？

長坂：私は絵を描く人ではないのですが、今回、まずは手を使って描くことが大切だと思っています。一度自分の手で描いたものを、さらにもう少しずらすためにシルクスクリーン印刷を使って複写しようと思っています。

菅江真澄も南方熊楠もそうですが、印刷技術がなかったからではなく、体験する手段や学ぶ手段として、自分の興味のある本や絵などを写すことでそれを自分のなかに取り込んでいったという感覚があります。真澄は旅の途中にメモ的に描いていたものを清書して、そのバージョンを泊めてもらった家の人にあげて、また次のバージョンをつくって…というように繰り返し描いていて、最後に残ったものが現存しているものです。今回においては、手で「写す」ということをやってみたいと思います。

唐澤　熊楠の話が出ましたが、彼の集中力って半端なくって、対象に深く入り込んでしまうんですよね。それを彼は「直入」と呼んでいます。ただ、熊楠には絶対外せない熊楠フィルターがあるわけです。直入して、彼のフィルターなり網のようなもので掴み取ったものを、彼の中で再構成して、アウトプットしたときにすごく面白いものができる。だから直入した対象と彼がアウトプットしたものというのは、ぱっぱり少しズレが生じているわけです。そして、そのズレによってすごく面白いものが生まれる。その辺り、長坂さんと通じるものがあるのかなと思いました。



菅江真澄と南方熊楠
（唐澤太輔のコラム菅江真澄②）

博物学者たちの夢はいつも叶わない。「世界」の全てを悉く収集し記録することは、人間には不可能なのだ。しかし彼らは、儚く虚しい夢にもかかわらず、命を賭ける。彼らは、概して、その成果を広く発表し名声を得ようとは思わない。彼らにあるのは「至純な好奇心」、それのみである。日本における偉大な博物学者といえば、やはり菅江真澄と南方熊楠であろう。「日本人の可能性の極限」とまで評された南方もやはり、菅江と同様、各地を旅し様々な物事を収集・記録した。私の知っている限り、不思議なことに、これまで両者が比較考察されたことはない。彼らは、比較を拒む「透明さ」を持っている。端的に、菅江も南方も捉えづらいのである。

菅江も南方も、自身のことを「博物学者」とは名乗っていない。その肩書きは、後世の我々がつけたものである。我々は、どうしても彼らに枠をはめないと落ち着かないらしい。つまり、肩書きという枠をもって固定しなければ、その圧倒的な「透明さ」に呑み込まれてしまうのではないかと不安になるのだ。「透明さ」、すなわち捉えづらさこそ、菅江と南方に共通する事柄である。その背景には、彼らのある種の無目的性がある。彼らの目的にはゴールが無いのだ。それもそのはず、「世界」を悉く知ることなど、神でない限り不可能なのだ。おそらく彼らもそのことは認識していたであろう。それにもかかわらず、彼らが旅をし、収集・記録をせざるを えなかったのは、ただただ「至純な好奇心」のためだ、あるいは根源的な衝動のためだったとしか言いようがない。

唐澤太輔　1978年、兵庫県神戸市生まれ。2002年3月、慶応義塾大学文学部卒業。2012年7月、早稲田大学大学院社会科学研究科博士後期課程修了（博士（学術））。早稲田大学比較思想研究所（学術研究員）、日本大学文理学部（専任講師）を経て、現在、秋田公立美術大学美術学部（准教授）。専門は、哲学・倫理学、文化人類学、華厳思想の研究、南方熊楠研究。著書に「南方熊楠の見た夢ーパサージュに立つ者ー」（勉誠出版、2020年）、「南方熊楠ー日本人の可能性の極限ー」など。

菅江真澄をたどる勉強会①

2020/02/16
キュレーターエッセイ

服部浩之
（インディペンデント・キュレーター）

1978年秋田県生まれ。アジアを中心に展覧会やプロジェクト、リサーチ活動を展開する。青森公立大学国際芸術センター青森「ACAC」（2010年）など滞在制作を軸としたアーティスト・イン・レジデンスを多数実践する。共同企画に「あいちトリエンナーレ2016「虹のキャンバンザライ」（愛知県美術館ほか［2016年］）、「Going Away, Closer」（ウィプレド・ラム現代美術センター、ハバナ［2017年］）などがあるキュレーター。秋田公立美術大学准教授。

美術の生態系 ーつくることを考え、ひらく場としての美術大学

本事業は秋田公立美術大学が、秋田県立近代美術館から展覧会開催の依頼を受けたことにより発足。展覧会完成までのプロセスを思考し、構築していく研究プロジェクトである。展覧会は（個人またはグループ）のキュレーターが企画を立て、テーマやコンセプトに応じてアーティストや作品、資料などを選出する。アーティストは、新作の場合はテーマに応答するかたちで作品を制作する。本事業もこの流れから大きく逸脱するものではなく、基本的には同じように展開する。ただ、「なにか」を生み出す人があつまる美術大学が主体となって実施する展覧会において、「つくること」自体を問うこと、あるいは「つくりかた」を考えることはとても重要であるため、展覧会をつくる過程と各アーティストの制作を可能な限りひらいてみようと考えた。

本事業は、「旅と創造」を大枠のテーマとする。旅の人生のなかで秋田に長く逗留し、この地域の地誌を残した紀行家・博物学者・菅江真澄の軌跡をたどる。同時に、複数名のアーティストによる同テーマにおける新作作品の制作が並行して展開されることになった。菅江真澄をたどるプロジェクトは展覧会のコンセプトを体現するもので、人類学者、哲学研究者、郷土史家を中心にチームを組み、勉強会やトーク、ディスカッションを重ねることで展覧会の核として深められていった。一方で、各アーティストの作品制作もそれぞれ並列の独立したプロジェクトと定義し、同時に進行し、作品が練り上げられていく。各プロジェクトは、アーティストが個人で進めるだけでなく、時にゲストを招いて対話をしたり、イベントなどを介して構想を発表することで進展していく。これらの過程は、定期的に発行する本ジャーナルで報告されていく。

観客は通常、文脈づけられた資料群やアーティストによる作品を完成された展覧会で鑑賞する。昨今は、参加型作品など観客が能動的に体験することを推奨する作品も多い。また、ボランティアなどのかたちでアーティストの制作に観客が参加することも多々ある。展覧会や作品の体験が既に多様なかたちをとっており、展覧会と観客の関係は必ずしも一方的なものではない。多くの公的な展覧会で、いかに観客に対してひらかれているかというオープンネスと参加が重要な話題だ。一方で本事業は、プロセスをひらくと述べてはいるが、観客の参加のあり方の探求を主眼に置くものではない。「つくること」がいかに実現されるか、そのプロセスに意識を向け、可能な限り制作過程をオープンにし、共有を試みるものだ。美術大学に参加するアーティストや研究者がそれぞれの専門領域において、いかにつくることを考え、実践するか、それをひらき、伝える場として、本事業を展開する。

ここで改めて、美術館という場を再考したい。美術館は作品や資料を収集し保存することで、ものの価値を定着させる場である。ある種の権力であり、権威である。アーティストたちによってつくられた無数の作品や活動は、館の方針に基づき僅かなものだけが選び出され、収蔵され、後世へと残される。地域の公立美術館の学芸員は日々研究を重ねることで、未来へと残すべきものを選出し続けねばならない。そして地域の文化史や美術史の上書きを続けていかなければならない。非常に重い責任を背負った仕事である。作品に価値を見出し、その価値を定着させることは、そもそも創造的な仕事だ。そう考えると、地域の芸術文化の拠点となる公立美術館で展覧会を開催することは、美術大学が地域美術史に直接的に貢献する可能性をひらくという大きな意味がある。美術館が価値を築き定着させる場なら、美術大学は誰も知らない可能性の種を生み出す場だ。美術大学に参加する人は、価値が生じる以前のなにがしかをつくっている。それが社会にとって意味や価値があるかどうかは、その制作者に決められることではない。惰性でもなにかを生むことはできてしまうため、いかに意識的にものをつくるかを徹底的に問うことが必要だ。美術館での展覧会は、制作することの意味を再考するうえでも大切な機会である。美術大学は生み出す場所、美術館は価値を築き守る場所と、お互いの立場は異なるが、美術の生態系においてそれぞれが担うのだ。

改めてこのようなことを意識したのは、秋田県立近代美術館で予定されていた展覧会が突然、開催の危機に陥ったからだ。「つくる過程を考え、ひらく」という目的を備えた本事業はこの騒動に応答し、この先、展覧会をどのようにつくりかえていくのか、新たなプロセスを構築する機会を得たとも言える。この事件を受けて、つくり生み出す場である美術大学に関わる私たちはどのように動き、どのような展覧会をひらくことができるだろうか。まずは議論を重ね、手がかりを掴み取っていきたいところである。

菅江真澄をたどる勉強会②

2019/11/13
PROJECT 〈00〉

「旅」「移動」「記録」「表現」などをテーマとする展覧会「ARTS & ROUTES −あわいをたどる旅−」に向けた公開プロジェクトとして始まった「菅江真澄をたどる勉強会」。10月7日に行われた第2回目の前半は、秋田に滞在して真澄の「木」に着目した作品を制作したアーティスト長坂有希による滞在制作についての話。後半は、長坂とインディペンデント・キュレーター・服部浩之、哲学・文化人類学研究者唐澤太輔の3名による「現代の視点から真澄の行為をたどる」をテーマにしたディスカッションを行った。

展覧会「ARTS & ROUTES −あわいをたどる旅−」の2020年度春の開催見送りについて

NPO法人アーツセンターあきたは、2018年度に秋田県立近代美術館より依頼を受け、同美術館と秋田公立美術大学による連携企画の展覧会として「ARTS & ROUTES −あわいをたどる旅−」を2020年度春に開催すべく準備を進めておりました。その一環として、2019年度中には、展覧会準備の過程を公開する試みとして、NPO法人アーツセンターあきた及び秋田公立美術大学の予算をもって、ジャーナルの発行やウェブサイトの開設、参加作家によるプレ展覧会の開催を行っております。

秋田公立美術大学、NPO法人アーツセンターあきた、秋田県立近代美術館の三者は、展覧会開催経費を12月県議会に補正予算（債務負担行為）計上し、当該経費が議決されれば、2020年2月から展覧会の広報等に本格着手をする計画で合意しておりましたが、今般、補正予算の要求から本展覧会企画が見送られる事態に至り、誠に遺憾ながら、2020年度春に同展覧会を開催することができなくなりましたので、お知らせいたします。

なお、展覧会の開催に関しましては、方向性を探りつつ、今後の対応を検討中です。

「ARTS & ROUTES −あわいをたどる旅−」は、展覧会という形でそれぞれのプロジェクトの成果を発表することを目指し、作家、リサーチャー、デザイナーなどの関係者がテーマと向き合って準備を進めてきました。企画運営を担う事務局として、目指していた展覧会を実現できる環境を新たに整えることも責務であり、それを遂行すべく関係機関や関係者と協議・調整を継続していきます。

2020年2月吉日
秋田公立美術大学 NPO法人アーツセンターあきた

〈PROJECT_04〉展覧会ゼミ ゼミ生からのコメント①

2019/11/13
8月に長坂さんの滞在（5日間）をアテンドした感想や、そこで感じたことなどを書いてください。
事務局より

「1回目の滞在から」
長坂さんはリサーチや制作をするうえで、非常にバランス感覚が良い人だなという印象を受けました。自分の既にある要素と、秋田での経験をうまく引き合わせ、しかし無理に繋げようとはしない。このバランス感覚が、これまで見えていなかった新たな視点に気付けたのの大きな要素であるということに、1回目の滞在を近くで見ていて強く感じました。また、あえて滞在前に秋田について調べることはせず、初めて訪れた土地での感覚を大事にしていたことが興味深かったです。それは、長坂さんがテーマとしている「これまで生活するなかで出会った、ものや、人、出来事」に出会うための所作なんだろうと想像することができます。普通行ったことのない未知の土地であれば、ある程度調べてしまうかもしれない。そうではなくて、行ったことのない未知の土地に入ったとき、どんな変化が自分の中で生まれるのか、それするもリサーチの一環として取り入れているのだろうと思いました。滞在中、「渇」という埋め立て地が気になり大湯村へ向かいました。一日大湯村を周り、話を聞いた結果、どうしようもなく気分が落ち込んだといいます。何故落ち込んだのか、その理由や大湯村に行った際に感じた多くの違和感を、長坂さんは無理に言葉にしようとはせず、様々な可能性を残したまま1回目の滞在を終えました。1回目の滞在から数週間後。少し時間が空き、大湯村に行った際に感じた様々な感情と違和感がどう変化したのか。学生にとも伝わるように丁寧に書いてくださった制作メモには、大湯村というワードはなく「一度離れてみる」という選択をしていました。そして、菅江真澄の動きや方法論を学び、多くの壁に向き合っていくのだろうと予感させるものでした。1回目の滞在は、5日間という短い滞在だったと思います。私自身の制作の経験としても、気になった場所に訪れ、自分が想定する以上の質量の出来事がふりかかったとき、どうしようもなく気分が落ち込み、今後どうすればいいのか、途方に暮れることがありました。自分の制作と重ねて、長坂さんならどうするのだろうかと滞在を横で見させていただいていました。中間報告の意味でもあったBIYONGPOINTでの展示を終え、近代美術館の展示に向けてどのような出会いがあり、展開が待ち受けるのか目が離せません。

谷口 茉優（秋田公立美術大学 4年生）
2019/12/02

〈PROJECT_04〉展覧会ゼミ ゼミ生からのコメント②

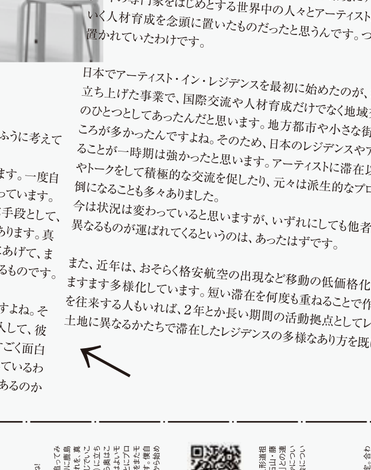
2019/11/13
長坂さんの滞在制作や
プレ展覧会オープンまでのサポートを通じて
感じたことなどを書いてください。
事務局より

長坂さんの滞在制作を近くで見ていく中で、様々なことを吸収していく姿勢や行動の早さが印象的だった。初めて秋田を訪れ、その土地の話を聞き、興味を持ったことに対してはすぐその土地に赴き、実際に見て、深く追求する姿勢があった。また、なにか1つに絞って追求していく中で、「これは違う」と感じたらすぐに切り替えて別のものを追求していったり、限られた期間の中で「できないことはやらない」「これは重要」などの決断が早かったりなど、とにかく行動、決断、切り替えが早いということを感じた。自分はこれまでレジデンスに関わった経験がほとんどなく、そういった姿勢を間近で見たことはとても刺激になった。今回関わっていく中で、新たなことを学ぶこと、新しい人に出会うことに対して好奇心と同時に不安を抱いていたのが正直な気持ちであった。しかし新たな土地で制作を進める長坂さんからは、知らない土地の未知のものに対する恐怖心や不安を全く感じなかった。新しいものや新しく出会う人に対して恐怖心を持たずどんどん進んで行ったり、今までやったことのないことに対しても「これはやったことがないけど取り入れてみたい」など、不安を感じさせなかった。そういった新しいことや未知のものを吸収していく姿勢があるからこそ、独自な視点で物事を掴り下げていくことができるように思える。その行動力や新たなものを吸収したり、取り入れていく姿勢があるからこそ、長坂さんの作品や展示が成り立つのだと感じた。長坂さん独自の視点で菅江真澄という人物や秋田という土地を掘り下げて、それを長坂さん自身が新しいやり方で表現したり展示になっているというのが、制作を間近で見て、また実際に完成された展示を見て感じたことである。

乙戸 将司（秋田公立美術大学 3年生）
2019/12/02

展覧会ゼミ

服部浩之による展覧会をつくるためのノウハウを学ぶ、秋田公立美術大学の学生を対象とした自主ゼミ。キュレーションやマネージメントに関心のある学生が2回の頻度で集まり、読書会（理論編）と展覧会の企画実施（実践編）を行なった。長坂有希による「プレ展覧会「木：これから起こるはずのことに出会うために／Trees: Audition for a Drama still to Happen」（2019年11月16日〜2020年1月12日）では、ゼミ生が企画運営・制作サポートを行う。
講師：服部浩之／マネージメント：石山律／ゼミ生：武田彩荷（4年生）・谷口茉優（4年生）・宮本しおり（4年生）・乙戸将司（3年生）・須川麻椋子（2年生）・伊東陽素（1年生）・三井晴香（1年生）

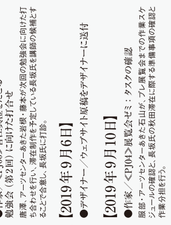


菅江真澄のコレクション

石倉敏明のブックガイド②

ティム・インゴルド著『ラインズ 線の文化史』

工藤晋訳
管啓次郎解説（左右社）
2014年



線とは何だろう？　文字を書くときも、絵を描くときも、僕たちは大抵、一本の線を描くところから始める。僕たちはいつも、線に沿って生きようとする。物語るとき、歌うとき、そして旅するときにも。僕たちは線が生まれるように未知の光景や不思議な料理を体験し、線を絡めるように他者と出会う。複数の線の出会いは、別の新たな線を生むこともあるだろう。僕たちは、何本もの生命の線に沿って世界を理解し、楽しみ、苦しみ、味わい、立ち止まる経験を重ねている。著者のインゴルドは、現代の芸術と人類学の理解を、根本から革新し続けている。インゴルドの手にかかれば、僕たちの生活も仕事も、社会や経済の構造も、まるでバウル・クレーの描く線画のように、生き生きと抽象化されて踊りだす。生きることは線を生むことだ。たとえワクワクするような旅の計画が、だれかの硬直した態度によって中断を余儀なくされたとしても、生きること、線を生むことを止めることはできない。旅は、線は続く。

石倉敏明　1974年東京生まれ。明治大学野生の科学研究所研究員。1997年より、ダージリン、シッキム、カトマンドゥ、東北日本各地で聖者や女神信仰、「山の神」神話調査をおこなう。環太平洋圏の比較神話学に基づき、論考や書籍を発表する。近年は秋田を拠点に、北東北の文化のルーツに根ざした芸術表現の可能性を研究する。著書に「Lexicon 現代人類学」（奥野克巳との共著・以文社）、「野生めぐり 列島神話をめぐる12の旅」（田附勝との共著・淡交社）、「人と動物の人類学」（共著・春風社）、「タイ・レイ・タイ・ワミ紬記」（高木正勝CD附属話集・エピファニーワークス）など。秋田公立美術大学准教授。

【JOURNAL 2号】
2020年2月発行
発行：秋田公立美術大学
デザイン：吉田勝信・梅木脩佑・川邉美唯
お問い合わせ・企画・編集：NPO法人アーツセンターあきた
〒010-1632 秋田市新屋大川町12-3
秋田公立美術大学アリエともさだ内
Tel：018-888-8137
Mail：info@artscenter-akita.jp

ARTS & ROUTES あわいをたどる旅

◎プロジェクト＝2019年5月始動　現在進行中
◎展覧会＝~~2020年4月25日(土)~~延期

展覧会会場＝未定
出展作家＝岩井成昭・岸健太・辺見里子・長坂有希・藤浩志
リサーチアンジェイト＝石倉敏明・唐澤太輔・小松祐彦
グラフィックデザイン＝吉田勝信・梅木脩佑
企画運営＝服部浩之
（芸術学子・石山律・藤本悠里子・高橋ともみ）
企画運営＝NPO法人アーツセンターあきた
主催＝秋田公立美術大学

www.artscenter-akita.jp/artsroutes

arts center akita
秋田公立美術大学
AKITA UNIVERSITY OF ART

【2019年4月16日】
●事務局運営／近代美術館×秋田美大連携展の相談
秋田県立近代美術館の担当者よりNPO法人アーツセンターあきたに対して、メール及び電話にて、近代美術館を会場とした美大との連携展実施の相談が持ちかけられる。

●事務局運営／　服部准教授へ協力依頼
アーツセンターあきたの岩根より、アーツセンターあきた理事長及び秋田公立美術大学教授の藤浩志に、近代美術館から相談内容について報告。准教授の服部浩之に参画の協力を依頼する。

【2018年4月26日】
●事務局運営／展覧会内容の検討開始
近代美術館よりオファーを受け、アーツセンターあきたが窓口となり、内容の検討が始まる。近代美術館の担当者へ、美大のリソースを活かした展覧会を考える旨を連絡。

【2018年5月22日】
●事務局運営／服部より「旅・移動・創造」をテーマとした展覧会案の構想提示
服部のアイデアで、菅江真澄を起点とした「旅・移動・創造」をテーマとした展覧会案が構想され、服部より秋田美大准教授の石倉敏明にも相談が持ちかけられた。
【服部から アーツセンターあきた岩根宛てのメール抜粋】
「旅」や「移動」を一つのテーマに、表現や創造とそのループを考える展覧会ができればと思います。一つアイディアとして、秋田に長く逗留した江戸時代後期の旅行家菅江真澄を起点に展覧会を組み立てられないかなと考えています。幕末には菅江真澄コーナーもあります。彼の時代の旅といのは、ある意味アーティスト・イン・レジデンスの概念的な始り方でもあったりして、興味深いなと思っています。旅や移動と創造というのを秋田から考える、学生や教員が各地から集まっているだけでなく、今回的なテーマとなりうるかなと。菅江真澄による時をからの時に眼えて、現在制作による新作も、旅や移動をきっかけに生み出すというような感じです。

【2018年6月6日】
●事務局運営／近代美術館とおうち合わせ
近代美術館より、アーツセンターあきたに岩根・石山で打ち合わせを行い、今後の事務手続きやスケジュールについて確認。

【2018年6月12日】
●事務局運営／展覧会会期の再検討
提案された展覧会スケジュールを踏まえ、展覧会の開催時期について、準備スケジュール及び追加予算の確保を考慮し、実施時期の検討をアーツセンターあきた岩根より近代美術館へ相談する。

【2018年6月19日】
●作家／山展作家の検討・打診
服部とアーツセンターあきた岩根・石山が協議し、今回のテーマに基づき、秋田美大教授の岩井成昭・岸健太、助手の辺見里子へ出展を打診した。

【2018年6月25日】
●事務局運営／企画書及び予算書案の作成と共有
アーツセンターあきたから、近代美術館の担当者へ展覧会「旅と創造のかたち（仮）」の企画書及び予算計画案を提出。

【2018年7月11日】
●作家／菅江真澄資料センター視察
服部・岸・辺とアーツセンターあきた岩根・石山が県立博物館・菅江真澄資料センターを視察する。

【2018年9月3日】
●事務局運営／展覧会会期の連絡
近代美術館の担当者からアーツセンターあきたに対し、展覧会の開催時期を2020年春とすることを伝える。

【2018年12月10日】
●作家／作家同士の勉強会開催
服部・岩井・岸・辺・アーツセンターあきた岩根・石山で集まり展覧会内容に関する情報共有及びテーマに対する各自の関心についての話を行う。

【2019年1月23日】
●作家／作家同士の定例ミーティングが延期
打ち合わせを設定するが、それぞれ業務等が忙しく、予定が合わず延期となる。

【2019年2月28日】
●事務局運営／民間助成金に申請
服部とアーツセンターあきた岩根・石山で予算に関する打ち合わせを行う。民間の助成金申請のための計画を最終確認し、申請書類の提出を行う。

【2019年3月12日】
●事務局運営／追加予算確保に向けて打ち合わせ
近代美術館とアーツセンターあきたの担当者が打ち合わせを行い、再検討した予算計画案と実施提示し、双方で（県予算以外の）追加財源確保に向けた努力をすることを確認。

【2019年3月22日】
●事務局運営／助成金不採用の通知
申請していた民間助成金の不採用通知が届く。

【2019年3月25日】
●事務局運営／近代美術館担当学芸員の異動

【2019年4月12日】
●事務局運営／企画進行の打ち合わせ
服部とアーツセンターあきた岩根・石山で、展覧会づくりの進め方や菅江真澄に関するリサーチ方法、勉強会の開催方法について打ち合わせを行う。現代美術がわかりにくいというイメージを払拭する試みとして、作品制作や展覧会づくりの過程を見えるようにすることを確認。その後、石倉さん唐澤太輔准教授と郷土史研究家の小松和彦氏参画の提案を受ける。

【2019年4月22日】
●作家／菅江真澄の墓をフィールドワーク
小松和彦氏を講師に招き秋田美大大学院の授業として実施した菅江真澄の墓等のフィールドワークに参加する。岩井・岸・辺・服部・石倉・アーツセンターあきた岩根・石山が参加し、なかなか開催できなかった第2回目の作家同士の勉強会となる。

【2019年4月23日】
●事務局運営／近代美術館との打ち合わせ
近代美術館担当者・秋田美大事務局・アーツセンターあきた岩根・石山で、今後の財源確保の方法等について打ち合わせを行い、アーツセンターあきたは民間企業への協賛依頼や民間の助成金情報の収集に着手する。

【2019年4月26日】
●事務局運営／学内公募企画への申請書提出
秋田美大学内公募企画の申請書を提出。「秋田芸術道覧記：プロセスを開き、つくり方をつくるプロジェクト」と題し、具体的な成果が見えにくい「プロジェクト」を参加と共有のためのプラットフォームと定義し、現代アートを地域社会に積極的に関っていく方法を探求する試みとして申請。

【2019年5月16日】
●事務局運営／クラウドファンディングを検討
アーツセンターあきたの三富が、クラウドファンディングの可能性について相談するため、運営事業者と面談する。

【2019年5月22日】
●事務局運営／学内公募企画の採択が決定
秋田美大の学内公募企画の採択通知を受領。展覧会準備に係る予算の目処がついたことから、秋田美大とアーツセンターあきたは展覧会準備（リサーチ、作家の招聘及び制作、広報）に着手する。

【2019年5月23日】
●作家／<PJ04>展覧会ゼミとの連携
学外から招聘する作家の滞在制作を展覧会ゼミと一緒に取り組むことを決定し、ゼミの運営として秋田美大キャリヤー BIYONG POINTでのプレ展覧会の実施を目指すことを確認。

【2019年5月27日】
●事務局運営／実行委員会立ち上げ準備
近代美術館担当者とアーツセンターあきたの岩根で、実行委員会の協約書